

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第93回

Hack For Japan 8年間の活動を振り返る (3)

● Hack For Japan スタッフ
鎌田篤慎 (かまた しのり) [Twitter](#) @4niruddha

今年で2011年3月11日から丸8年が過ぎ、東日本大震災から数えて9年目に入りました。我々Hack For Japanではこれまでの活動を思い返し、その関わりを通じて見えてきたこと、自分自身に起きた変化などを議論する振り返り会を実施しました。今号は前回(2019年8月号)に引き続き、振り返り会の後編をお伝えします。

振り返りの最後となる今号では、我々が震災での経験を通じて意識した防災、減災への備えと、震災以降も度々発生した日本における災害への対応についての話が中心となります。本連載を読まれているエンジニアのみなさんにも日頃の備えの重要性と、みなさん自身のスキルが世の中の役に立つという点をお伝えできればと思います。

震災をきっかけに 変化していった開発者達

及川：我々は震災直後に被災地に向けたシステム開発を行うハッカソンを何度か開催しました。その中で出会ったエンジニアの1人は、こうした開発系のイベントに参加するのはこれが初めてだと言っていたのですが、そのときの想いや様子をブログでしばらくの間書いてくれました。その彼も、今ではユーザグループの1つでコミュニティリーダーをやっています。ほかにも楽天でハッカソンをした際に出会ったエンジニアも、「社外の開発系のイベントに参加するのは初めてなんです」と言っていたのですが、そのあと、何度か開発者向けのイベントで顔を合わせる中で、仕事のステージも変わってい

く様子がうかがえました。

こうしてみると、震災を機に始まった我々の活動に協力してくれたことがきっかけで、その人たちの人生にも多少なりとも影響があったのだと、8年もの歳月を経たいま感じられるようになってきました。関：そういう意味では私もこうしたHack For Japanの活動を1つのきっかけに「Code for Japan^{注1}」を立ち上げましたし、この場にいるみなさんも少なからず8年の間に変化してきましたよね。

震災をきっかけにした 防災・減災の取り組み

及川：かく言う私の変化というと、防災・減災に関連する活動をしてきました。ご存じのとおり一般社団法人の「IT DART^{注2}」を発起人として立ち上げ、現在も活動は続いています。団体としての位置づけは災害における中間支援団体という側面が一番強く、震災などの自然災害が発災した際に、現地に赴いて活動するような災害ボランティア団体に参加される方々を支援するという活動をおもにしています。

最近はこの災害対応の経験をもとにいくつか対応がメニュー化されてきています。災害ボランティア団体が現地に前線基地を作って、ボランティア活動の拠点とするわけですが、往々にしてインターネットなどの通信環境や設備が整っていないことが多いのです。そこで我々が中間支援団体として、そうした拠点到パソコンやプリンタ、無線LAN

注1 <https://www.code4japan.org/>

注2 <https://itdart.org/>

Hack For Japan 8年間の活動を振り返る (3)

振り返り会

Hack For Japan メンバー紹介

今年の振り返り回では、全13名のHack For Japanメンバーが集まりました。本連載のバックナンバーで見覚えのあるメンバーもいるかと思います。それぞれ別々の企業に属しながらも、各々のやり方でHack For Japanの復興支援活動に震災当時から取り組んできました。また、そこからさらに裾野を広げて防災・減災や開発者支援、IT教育などの分野で社会貢献に携わるメンバーもあり、Code for Japanの設立につながっています。



山崎 富美

Hack For Japan立ち上げ当時はGoogleに在籍し、東北Tech道場などにも関わる。現在はNianticに在籍。



佐伯 幸治

Hack For Japanではコピーライティングを主に担当。普段はフリーランスとしてWebや紙媒体の編集制作・コピーライティングに携わっている。減災インフォなども運営。



吉岡 弘隆

オープンソースの先駆者として、ミラクル・リナックス等を経て、楽天の技術理事を務めた後、現在は定年退職をし、大学生として研究に動いている。

環境などの機材を持っていき、現地でセットアップしてデジタルに情報を取り扱える環境を整えることがその1つです。一方で私達の団体に所属するメンバーの数は多いのですが、災害はいつ何時となく発生するため、メンバーの中でも普通の会社員だと対応が難しく、実働できる人員の数に限りがあります。そうしたことから、フリーランスなど時間の融通が利かせられるメンバーの負荷が高まってしまう点が目下の大きな課題です。

ほかのメニューとしては、被災地入りしたボランティア団体がどういう団体で、どういった活動を被災地で行っているかを見える化するシステムなどを用意しています。

また、これまでの活動からの広がりや、必ずしも防災や減災とはつながらないのですが、オープンデータ系のところから声がかかるが増えてきました。たとえば、東京都などのオープンデータを議論するような会合に有識者として招かれたりなどすることもあります。

山崎：被災地入りしたボランティア団体がどういう団体で、どういう活動をしているかというシステムは見るができるんですか？

及川：一般には公開していません。実際に利用するのは各地に存在しているボランティア団体をつなぐ団体で、その中で共有される情報システムになっています。ボランティア活動のうえで、お互いの様子を知るためのものなので公開していません。

たとえば、JVOAD (全国災害ボランティア支援団体ネットワーク)^{注3}という活動の中では、自然災害が発生すると、誰かが音頭をとって現地入りしていきます。その際に効率的に支援を進めるために、情報連絡会といった形で誰がどういうアクションを取っているかというのを共有する場が設けられます。これがこれまでは口頭で行われていたものを、情報さえ出してくれれば、我々がシステムに反映し、翌日の会議などで配布する紙の資料として使えるようなシステムなんです。

震災当時から進化したハードウェア

及川：東北の各地にも行ける範囲で行っています。近いところだと福島県の会津大学で行われている「パソコン甲子園^{注4}」に見学しに行きました。そのときに佐々木さんのオフィスにも顔を出しに行きました。(メンバーの)みなさんにもぜひ行ってもらいたいのですが、佐々木さんのオフィスは秋葉原の電子部品屋さんとも遜色がないほど充実した環境になっているんですよ。

震災の当時と大きく違って、今はIoTなどのハードウェアも活用したシステム開発が非常に簡単になっているようになってきました。こうした環境は次なる災害にも有効な手段になる気がしています。また、

注3 <http://jvoad.jp/>

注4 <https://web-ext.u-aizu.ac.jp/pc-concours/index.html>



関 治之

Georepublic Japan 社 CEO。Geo Developer として位置情報系のサービスを数多く立ち上げてきた。Code for Japan を立ち上げ代表理事も務める。



佐々木 陽

福島県会津若松のGClue 代表取締役。Android、iOSアプリ、ハードウェアの開発が主な事業。大学生などにプログラミングを教える活動を10年以上行っている。



三廻部 大

震災当時はGoogleに勤め海外に出張していたことから、時間差を活かして震災直後のHack For Japanの活動をサポート。現在はArm Treasure Dataに勤務。



富樫 俊和

震災当時はヤフーに勤め、Hack For Japanではリレーションを担当。経産省、MRIと連携し石巻ツアーを企画。現在はソフトバンクにてプロモーションを担当。



清水 俊之介

株式会社dott CTO。東日本大震災における復興支援活動の中でHack For Japanと関わり、途中からメンバーとして活躍。元は絵画修復士だったがエンジニアに転身した。

昨年は震災以降、毎年通っていた宮城県石巻市に初めて一度も行かなかった年になってしまいました。すべての被災地を巡ることは難しいのですが、今年は自分の中で縁の深い会津と南相馬、石巻には顔を出していきたいと思っています。

日本と海外における防災の違い

三廻部：震災後にHack For Japanで活動したあと、当時勤めていた会社を辞めてイギリスに渡り、現地のスタートアップに勤めていました。イギリスなどから見て防災について思うところは、自然災害というよりは人災なんです。たとえば、イスラミックステートによるテロなどのほうが人々を悩ませたりしています。

自然災害も人災も現地の人々が困った立場に置かれてしまうという点では変わりがなく、結局は人と人とのコミュニケーションが大切になるのですが、そうした場合に表出する課題も似たようなものがあります。たとえばデマが流れるようなことは東日本大震災のときと同様に人災でも同じように発生しています。そうしたことを解決するために自分のスキルが役立てられないかを今は考えたりしています。

山崎：前職でクライシスレスポンス^{注5}に携わってグローバルに展開していくことを検討したときに感じたのは、日本やフィリピンなどの東南アジアといっ

注5 Googleが提供している災害情報サービス。

た自然災害が集中する国々では非常にニーズが高い一方、イギリスやドイツなどでは自然災害自体が少なく活動が小規模になってしまう状況があることでした。そこでヨーロッパ諸国ではテロなどの対応にシフトしていく流れになったので、三廻部さんの言うとおり災害の質が違うというのはありそうです。

季節によって被害の拡大が想定される災害

石野：妻の実家が昨年の9月に発生した北海道胆振東部地震^{いぶり}が起きた町でした。震災はどこで起きるのか本当にわからないので気を付けたいところです。

山崎：奥さんのご実家の状況や町の状況は実際どうだったんですか？

石野：半壊したと聞いています。それまで北海道はあまり地震が起きるイメージはなかったのですが、実は今年の2月にも大きく揺れました。昨年9月のもより小さかったのですが、2月ということもあり、極寒の季節に大きな震災が発生すると多くの人が亡くなったかもしれないと肝を冷やしました。

関：北海道の災害は我々が得意とするような情報で解決できる課題が少なく、我々として支援できることが少ないという点がつらいところですね。

石野：北海道の冬に大きな地震があった場合は、相当量の水と石油がないと非常に危険な状況になるというのがよくわかりました。妻の実家もポータブルのストーブをあらためて購入したそうです。

Hack For Japan 8年間の活動を振り返る (3)



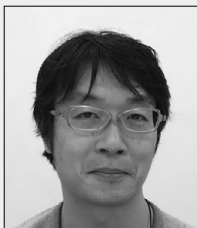
小泉 勝志郎

震災直後は南相馬でアプリ開発者育成や「うらと海の子再生プロジェクト」にてIT関連を担当。現在はシニアの開発者育成も手がける。株式会社テセラクト代表取締役。



高橋 憲一

震災後に立ち上がった東北Tech道場で当初から現在に至るまで講師を務める。現在は株式会社カブクに所属。



石野 正剛

震災直後に福島第一原発から放出される放射性物質と風向きを地図上に可視化するスマホアプリ「風@福島原発」を開発した。



及川 卓也

Hack For Japanの立ち上げ後も「IT x 災害」の開催や「一般社団法人情報レスキュー隊(IT DART)」を立ち上げる。現在はTably株式会社の代表取締役。



鎌田 篤慎

震災当時、APIを扱う仕事に就いていたことから、国の復興支援APIへの提言や福島のITコミュニティ「エフスタ!!」のサポートなどを行う。ヤフー株式会社に所属。

震災の風化における課題

富樫：現在はさまざまなプロモーションの仕事に携わっているのですが、気になっているのは災害が風化し、人々の記憶が薄まっていくことです。以前にたくさん集めた被災地の写真なども、今ではあまり話題にも上がらなくなりました。

山崎：そういう意味では、やはり3月11日という日を起点にするしかないように感じています。ただ、来年は東京オリンピックもあることから、風化という視点でみると世の中の意識も東日本大震災から外れていき、2021年にはどうになってしまうのか不安です。

いまだに課題のある情報発信

佐伯：今、減災インフォ^{注6}というボランティア団体の運営に携わっています。西日本の豪雨災害では情報発信がどうなっているか気になり調べたところ、LINEやTwitter、Facebookなど自治体によって利用しているツールがバラバラで、そのあたりが統一されていないことで情報を受け取る市民も混乱してしまうのではないかと憂慮しました。

関：本当は国が指示できると良いのですが、自治体に対して強制力のある形で指示できないこともあり、ガイドラインなどを作って案内もするのですが、強

注6 <https://www.gensaiinfo.com/>

制力がないこともあって、災害に限らずの話ですが、課題としては大きいものがあります。自治体の中にITに詳しい人がいるとも限らず、いたとしても異動があるため難しい側面があります。

3月11日の振り返りを終えて

東日本大震災をきっかけに多くの出会いが生まれ、そこからさまざまな課題を解決するための取り組みも数多く生まれました。震災当時に出会った学生たちもプログラミング教育を通じて、多くの若者がエンジニアという職業を選択し、成長した姿を見せてくれています。そうした明るい話がある一方、まだまだ災害の備えとして万全とは言えないことも振り返りを通じてわかりました。この8年間の振り返りを終えて、思いを新たにこれからの活動をしていきたいと思います。SD

▼写真1 振り返りを終えてメンバーで記念撮影

